

悪 霊 第十部・取り憑かれし者たち

悪
霊
第十部・取り憑かれし者たち

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
- 安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤兒院建設に奔走する
- 猪俣佐和子……………元党員。上海で工作運動に従事。活動名・梅ハナ梅バチ
- 飯島貴代美……………元党中央委員。上海で工作運動に従事。活動名・芳芳フアンフアン
- 金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
- 佳代……………貧しい農家の娘。安藤邸の女中
- 韓愛子ハンエジャ……………元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
- 李麗姫イヨヒ……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
- 篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
- 初代……………津島の妻。元弘前の芸者
- ミス・スメドレー……………上海在住のアメリカ人ジャーナリスト。
- 佐藤碧子……………菊池の秘書
- 小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
- 宮様……………陸軍大尉。参謀本部作戦課付
- 安藤澄……………東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
- 北一輝……………国家主義者
- 馬海松……………『モダン日本』編集長
- 菊池寛……………文藝春秋社社長
- 津島修治……………作家志望の青年

- 山根教授……………弘前高校教授。孤兒院研究の第一人者
- 倉石……………県会議員
- 岡沢子爵の令息……………黒襟隊長
- 思芳……………支那人美少年
- 仁科中佐……………上海派遣軍将校
- 倉持英輔……………南京日本総領事館書記生

【時・場所】

昭和八年（一九三三）十二月～昭和九年六月。東京、弘前、北海道H市、上海、南京。

昭和八年も押し詰まった十二月の昼下がり。

東京・内幸町にある文藝春秋社は、年末進行の慌ただしさに包まれていた。

「や、マーさん、お疲れ様です」

玄関から入ってきたインバネスの外套にソフト帽姿の青年に向かって、校正刷を抱えた編集部員が忙しげに口だけで挨拶し、通り過ぎていった。マーさんと呼ばれた長身の青年は、顔見知りの社員たちに、如才なく邪魔にならぬよう目礼をかわしながら、階段をあがっていった。

『文藝春秋』は大正十二年、関東大震災の直前に、作家の菊池寛が刊行した。すでに流行作家だった菊池の家に出入りする文学者志望の青年たちに発表の場を与えようとつくった小冊子が始まりで、売れっ子作家をからかう文壇ゴシップがメインだったが、順調に部数を伸ばし、今年、創刊十周年を迎えていた。

青年は、二階の社長室の前で足を止めた。二十一歳の女性秘書、佐藤碧子が青年の足音に顔を上げ、「あら」と顔をあからめた。青年は周りに人がいないのを確かめ、彼女の額に接吻する。いやだわ……。ますます顔を赤くして俯く碧子に、青年は「いるかい？」と親指を立てた。いま、新聞に目を通してらっしゃるわ。そういう碧子に領き、青年は社長室のドアをノックした。

「馬です」

そう告げると奥から、おう入れ、と甲高いしゃがれ声がかえってきた。ドアを開けると、社長

の菊池寛がデスクに広げた新聞紙に目を通してしている。小柄で小太り、細い目に団子鼻、ちよび髭に眼鏡と風采のあがらぬ菊池は、もうそろそろ四十五歳。

「どうかね、『モダン日本』のほうは？」

広げた新聞紙の上に眼鏡を置き、短い両腕を天井につきあげて伸びをしながら菊池は問うた。新春号の校了に向けてがんばってます。今回は目玉記事が多いから、期待してください。そういう青年の声には、かすかな訛りがあった。

マーさんとは馬海松。二十八歳の朝鮮人青年である。十九歳のとき、菊池寛に気に入られて文藝春秋社に入社した。三年前、菊池寛が『文藝春秋』の系列誌として『モダン日本』という雑誌を創刊したとき、二十五歳の若さで編集長に抜擢された。朝鮮人青年として異例の出世は、出版業界の話題となった。

ソファに腰をおろすと、秘書の碧子がコーヒーを二つ運んできて、応接机に並べて一礼し、去り際に意味ありげな目配せを馬海松に送った。馬は表情を崩さなかった。吉原に近い地域の妾の娘であるためか、異性と肉体関係を結ぶことに抵抗の少ない碧子は、社長の菊池とも男女の仲であることを彼は知っていた。

馬海松に向かい合ってソファに座った菊池は、コーヒーカップをとりあげて一口飲み干してから口を開いた。

「昨夜、ある新聞の社会部記者と会ったんだがね」

菊池はそう言って声を潜めた。

「きみ、最近、華族や資産家の子弟がたてつづけに殺されているのは知ってるだろ」

「ええ、大変な騒ぎですね」

馬海松は頷いた。九月の末に、麻布の路上で華族令嬢二人の射殺死体が、駒場の大河原子爵邸前で子息の章雄の死体が発見され、野島男爵子息の息子三郎が発狂した態で街をさまよっているところを保護される事件は、帝都を震撼させた。つづいて十月末に、今度は三人の華族子弟が死体で発見された。十一月末には、華族子弟が一人と資産家子弟が二人、やはり惨殺された。

警視庁はメンツにかけて必死の捜査を行ったが、犯人逮捕には到っていない。世間では警察の無能を糾弾する声とともに、様々な風評を呼んだ。赤いマントを羽織った紳士が夜な夜な徘徊しているという噂が流れていたのだ、犯人はその赤マントだという者もいた。

『モダン日本』でも何かしら記事にしようと話し合っていたところですよ」

「それについて、ちょっとした情報があつてな」

菊池は、煙草に火をつけながら言った。

「くだんの社会部記者がよしみのある刑事から聞いた話だが、殺された連中には、共通する点が一つあると言うんだな」

「なんですか」

「これが、実におぞましくてね」

背をかがめ、額を寄せてくる菊池に、馬海松も長い背を折った。

「全員、ホーデンを潰された上に……」

ホーデンとは鞆丸を意味するドイツ語である。馬海松は青ざめた。

「なにを切り取られて、喉に突っ込まれていたというんだな」

「ほんとうですか？」

身を乗り出す馬海松に、菊池は眉を擡めて説明した。

「野島男爵の息子だけはホーデンを潰されたただけでなには切られず、おかげで一命はとりとめたが、発狂して廃人同然だ。いまだ犯人の手がかりは掴めず、十二月にまた被害者が出るかもしれないというんで、華族やブルジョワの連中はたいそう怯えているそうだけ」

「恐ろしい話ですな」

馬海松は、首を振った。

「新聞をいくら読んでも、どういう手口で殺されたのか分からなかつたけれど、そういうことだったんですか」

「その記者が言うには、警察から緘口令が敷かれて自分の新聞には書けない」

新聞記者は、官庁とのつきあいで、得られた情報をすべて記事にできるわけではない。紙面にできない情報を雑誌社に売って小遣い稼ぎをすることは、よく行われていた。

「材料は提供するから、おたくで記事にならんかと言うんだが……」

「本誌では無理というわけですね」

馬海松の言うとおり、『文藝春秋』に載せるには刺激が強すぎる。猟奇事件の記事を毎号数多く扱っている『モダン日本』に掲載するほうが適切だろう。

「そうなんだ。きみんところで、扱ってみないかね」

「わかりました。その記者に会ってみましょう」

連絡先を教えてください、と言う馬海松に、菊池は懐から名刺入れを取り出し、くだんの記者

の名刺を取り出して馬に渡した。馬は手帳に連絡先を書き付け、名刺を返した。

「誰に書かせるかね」

「そうですね」

馬は考えをめぐらせるような面差しを作った。

「最近マンネリ気味なんで、新鮮な若い記者を使いたいですな。こちらの方針どおり、どぎつい話を作ってくれる書き手がいればいいんですが」

それからしばらく雑談した後、社長室を辞して、これから所用で虎ノ門に向かうという馬海松を菊池は、玄関まで送ろう、と一緒に部屋を出た。階段を降りようとして階下の編集部で何やら騒ぎが起こっていた。

「なんだね？」

菊池が碧子に問うと、売り込みですわ、と答えた。

「帝国大学の学生さんです。なんでも井伏さんのお知り合いだとかで……」

井伏？ 首を傾げる馬海松に、菊池寛は、ああ最近たまに埋め草を書かせている陰気な男か、確か魚みたいな名前だったな、鰯とか鮎とか、と呟いた。「鱒二さんじゃないですか？」と碧子が苦笑した。人手が足りない時は、ゲラの整理を手伝ったりするので、寄稿者の名前は結構頭に入っている。埋め草とは、原稿が少なくて誌面に空白ができた穴埋めに使う雑文のことである。菊池は売れない作家にそんな仕事を与えて小遣い稼ぎをさせていた。

階段を下りると、君、あれはうちでは載せられないと何度も言ったじゃないか、とハエを追い払うように手を振る編集者に、学生服姿の長身の若者が作り笑いを浮かべて、せめて理由だけで

も聞かせてくださいよ、ご指示どおりに書き直しますから、と幾度も頭を下げている。

菊池がそつと「失敬するよ」と耳打ちし、急いで階段をあがっていった。顔を知られているだけに、うるさい売り込み青年に捕まっては面倒だと退散したのだろう。馬海松が外套を羽織って外に出ようとすると、「馬海松さんですよね！」と、青年が走ってきた。先日、雑誌のグラビアでお見かけしました。お若いのに雑誌一冊を任せられるとは、以前から尊敬申し上げていたんですよ。あ、失礼、名乗りがまだでしたね。ほくは津島修治と言います。ぜひ、これを読んでほしいんです。そう言って差し出した原稿用紙の一枚目中央にこう大書されている。

「猿面冠者 太宰治」

なんと読むのだろう。馬海松が首を傾げていると、津島と名乗った青年が自ら説明しはじめた。「ださい・おさむ」と呼びます。平安時代、学問の神様と言われた菅原道真は、藤原氏の陰謀で九州の大宰府に流罪となりました。ほくの実家は青森県の大地主なんです、所有する土地は、ぜんぶ兄のものになる。お前は東京で文学でも勉強してると帝大仏文科に島流しにされました。ほくは厄介者なんです。その思いをこのペンネームに込めたわけです……。

津島青年が、芥川龍之介ふう（あながわりやうのすけ）に七三に分けた髪をしきりと撫で付けながら早口で喋る内容は、馬海松の脳裏には半分も入ってこなかった。津島青年自身にとっては深刻であろう自己紹介も、東京に二万人いると言われる作家志望の青年たちの売り込み攻勢をかけられている雑誌編集長にとっては、掃いて捨てるほどある身の上話のひとつに過ぎない。

文藝春秋社の社屋を出て虎ノ門に向かって歩き出した馬海松は、しつこく追いかけてくる津島青年の長広舌を聞き流しつつ、「猿面冠者」と題した原稿を広げてみた。

——どんな小説を読ませても、はじめの二三行をはしり読みしたばかりで、もうその小説の樂屋裏を見抜いてしまつたかのやうに、鼻で笑つて巻を閉ぢる傲岸不遜の男がゐた。ここに露西亞の詩人の言葉がある。「そもさん何者。されば、わづかにまねごと師。氣にするがものもない幽靈か。ハロルドのマント羽織つた莫斯科子。他人の癖の雛案か。やはり言葉の辭書なのか。いやさて、もぢり言葉の詩とでもいつたところぢやないかよ。」いづれそんなところかも知れぬ。この男は、自分では、すこし詩やら小説やらを讀みすぎたと思つて悔いてゐる。

——夜、寢床にもぐつてから眠るまで、彼は、まだ書かぬ彼の傑作の妄想にさいなまれる。そのときには、ひくくかう叫ぶ。「放してくれ！」これはこれ、藝術家のコンフィテール。それでは、ひとりでもせざるにばんやりしてゐるときには、どうであらう。口をついて出るといふのである。Nevermoreと云ふ獨白が。……

「これはなんですか？」

氣取つたつもりで独りよがりな書き出しに、足を止めた馬海松は、うんざりした声で問うた。

津島青年は、得たりとばかりにしゃべりだした。

「東京には二万人の作家志望の青年がいるそうですね」

さきほど同じフレーズを思い浮かべたばかりであつた。馬海松は苦笑した。津島青年は続けた。「ほくもその一人かもしれません、そんな青年の内心を赤裸々に写真に写実した実験作です」

なおも喋ろうとする津島青年を手で制して、立ち止まつたまま原稿用紙をめくり、斜め読みを始めた。東北地方の名家に生まれた帝大生の主人公は、ろくに勉強もしないまま送りで遊興したり左翼活動に参加したりと自堕落な生活を続けていた。このままではいけないと一念発起して

小説を書き出すのだけはどうもいかない。

やはり、よくいる文学青年だ……。馬海松は思った。自意識だけ高く、屈折した自分自身の心情を氣取つた修辭を駆使して文章にすれば「作品」になると勘違いしている。

「ねえ、きみ」

馬海松は足を止め、津島青年に訊ねた。

「きみは、酒場で独り呑んでいて、隣の席の男が身の上話を始めたら、耳を傾けますか？」

「ああ、そうですね……」

津島青年は作り笑顔を崩さぬまま首を傾げて言った。

「身の上話ほどつまらんものはないというのが、ほくの持論です」

「ではなぜ、読者がきみの身の上話をおもしろがると思つたんです？」

津島青年は虚を突かれたように笑みをおさめたが、すぐに態勢を立て直した。

『モダン日本』には、猟奇事件や情痴事件の関係者の告白記事がたくさん載っていますよね」

「それが……？」

「ぼくは、貴誌にびつたりりの男です。なにせ、二回も自殺を企てた男です。しかも、二回目は銀座のカフェの女給と心中しようとして、自分だけが生き残つたんです」

「なるほど」

「その一件を書いた小説もあります。こんど持ってきます」

「こんなものじゃだめです」

馬海松はびしゃりと撥ねつけた。

「文章は冗長で独りよがり、改行が少ないから読みづらい。うちの雑誌は、せいぜい数千人しか読者のない文芸雑誌じゃありません。万人相手の大衆雑誌です。掲載したいのなら、われわれの雑誌をよく読んで、よく研究してから出直してきなさい」

「そうですか。困ったなあ……」

背を向けて歩き出した馬海松の背後で津島青年が悄気た声を出した。振り返ると今にも泣き出しそうな顔でうなだれている。

「今度こそ、死ぬしかないなあ」

「泣き落としですか？」

「そうじゃないんです。ほんとうにせっぱ詰まっているんです」

津島青年は懇願した。来春には帝大を卒業しなければならぬのだが、ぜんぜん授業に出てないので見込みがない。実家からは仕送りを打ち切ると言われ、作家として身を立てなければ、妻ともども首をくくるしかないのだ、と。

「ふうん」

品定めするように津島青年を見つめていた馬海松は、ふと思いついて言った。

「きみ、ひとつ猟奇事件の記事をやってみないかい？」

津島青年は顔を輝かせた。

半月後。千鳥足に赤い顔で中央線荻窪駅そばの借家に帰宅した津島青年は、また酔っぱらってしようがない人ね、と愚痴りながら布団を敷く妻の初代に「おい、ついにお前の亭主の作品が雑

誌に載るぞ」とえびす顔で言った。はあそうですか、また物入りですね、と生返事が返ってきた。初代にとつて夫がいう「雑誌」とはアマチュアがお金を出し合って刊行し誰も買わない同人誌のことだった。「今度はこちらと原稿料が出る」と言ってもなかなか信用しない初代に、津島青年は、おいそこに座れ、と敷き布団の上に正座した。今度の雑誌は『モダン日本』という菊池寛先生が始められた大雑誌だ。原稿料だつてもちろん出る。前借りもできるから年も越せそうだ。年明けには本屋に並ぶ。これが校正刷だ。どうだ参ったか。

「あんた、すごいねえ」

三歳年下、弘前で芸者をしていて、同地の旧制高校に通っていた津島青年と駆け落ち同然に上京してきた初代は、うっとりとした眼で夫を見上げていたが、ふと、そんな大雑誌に、なんで無名のあんたの小説が載せてもらえるわけ？ と問うた。いや小説じゃないんだ、と津島青年は経緯を正直に話し、校正刷を読み、と言った。津島青年は、作品を仕上げると誰かに読ませたくない性格だった。いつものあんたの小説と違って読みやすいわねえと言いながら「怪奇・華族子弟連続殺人事件の真相!」と題する記事を目を通していた初代はやがて絶句し、「へーえ、きんたまを潰されてねえ……」と呟いて校正刷を床に置いたが、急に思い出したように言った。

「そういえば今年の正月、弘前で同じような事件があったらしいわよ」

なにに、それはなんだ。膝を寄せた津島青年に初代は説明した。弘前で芸者をしていた頃の朋輩がお座敷で聞いた話だが、正月早々、柔道の師範とその弟子が裏通りで殺される事件が起った。二人とも、鞆丸を二つ潰され悶死したという。

「警察は秘密にしたけれど、噂が流れて大変な騒ぎになったんだって」

「そりゃあ、きんたまを潰されるなんて、男にとってはいちばんの悪夢だからな」
「そんなに痛いのか？」

「痛いなんの、なにより、男でなくなってしまう」
「ふうん」

首を傾げていた初代は、またも何かを思い出したように、「そうだ！」と両手を合わせた。
「弘前じゃないけど、昔、北海道のほうで、同じような事件があったわ」

あれは、あんたと駆け落ちする前の年だったかな、北海道から弘前に商売しにやっていきたくお客さんから聞いたけど、H市で、大きな会社社長の息子さんをはじめ六人だったか七人だったか、たてつづけにきんたまを潰された死体が見つかった事件があったのよ。

津島青年は腕組みをして考えこんでいたが、やがて顔をあげ、こいつは金になるぞ、と満面の笑みを浮かべた。翌日。津島青年は文藝春秋社の『モダン日本』編集部を訪れた。話を聞いた馬海松は、即座に決意した。二月号に続報として載せましょう。経理で取材費を受け取ってください、と出金伝票を手渡した。

数日後の十二月三十日、犬吠埼いぬぼうさきに初日の出を見に行くと、自家用車で家を出た資産家の息子四人組が、翌朝、死体で発見された。睾丸を潰され、陽物を口に含まされ、苦悶の末の死と見えた。

II

青森市内にある東奥日報社は発行部数三万余、県内一の新聞として知られていた。昭和九年正

月のある日、同社の資料室のテーブルに座る津島青年の姿があった。青森生まれの津島青年は、東奥日報社が日曜版付録として刊行している『サンデー東奥』に短編小説を載せてもらったことがあった。そのついで、妻・初代から聞いた一年前の猟奇事件を調べに訪れたのである。

「これですな」

資料室長の肩書きを持つ、うだつのあがらなそうな古参社員が、古新聞の束を持ってきて、津島青年が座る机の上に置いた。広げてみると確かに「柔道師範とその弟子、弘前市内で惨殺」
「無残なるその姿、殿下御臨席の植樹祭の帰り道」と見出しが躍っている。

「しかし、へんですねえ」

津島青年は記事をノートに写し取りながらわざとらしく呟いた。資料室長が訊ねた。

「なにがですか？」

「この記事をいくら読んでも、被害者の死因がはっきりしない」

「そりゃそうでしょうな」

資料室長が苦笑した。

「このところ、警察の検閲もうるさいですからね。左傾学生の取締りが一段落したので、風紀びん紊らんの方面が厳しくなったんですよ」

「じゃあ」

津島青年は声を潜ひそめた。

「大事なところを潰されて悶死したという噂は、本当なのですか？」

資料室長は頷いた。犯人は捕まったのですか？ そう問う津島青年に、資料室長はますます声

を潜めた。それがあなた、被疑者として宿無しのごそ泥が捕まったんですがね、取調べ中に警察の窓から飛び降りて死んでしまいましたよ。被害者は柔道の師範、こそ泥なんぞに殺されるはずはないと噂しあったものですが、そのまま有耶無耶です……。

よほど暇をもてあましているのだろう。珍客に相手に内緒話をべらべら喋る室長に、ふうんと領きながら、津島青年は何気なく隣の記事に目をやった。和服姿の若い美女の写真が卵型にトリミングされて印刷されている下に、小さな談話記事があった。事件当日に行われた宮様御臨席の植樹祭に参加し、「尊いお姿に感激いたしました」というようなことが述べられている。

「誰です、この美人は」

津島青年の問いに、資料室長は答えた。伊集院満枝嬢ですよ。

「伊集院……？」

「まだ二十三歳か四歳とお若いのに川奈財閥の大株主でしてな。実質的な経営者という噂もある。その方が宮様と一緒に弘前に来られて、植樹祭に参加し地元の学校で講演をしたのです」

俺と同じくらいの年齢か……と津島青年は面白くなさそうな顔になって、地元の方なのか？ と問うと、川奈産業の本社は北海道S市で、伊集院嬢のご実家はH市ですよ。

H市という言葉に、津島青年はびっくりと反応した。初代から聞いた、六〇七人の男が立て続けに鞆丸を潰されて殺された事件は、H市ではなかったか。

「そういえば」

津島青年は問うた。

「四年ほど前に、H市で同じような事件がありましたよね」

室長はしばらく首をかき上げていたが、ややあって、「ああ、ありました、ありました」と手を打って再び書庫へと姿を消し、やがて新聞紙の束を持って戻ってきた。広げてみると、「恐るべき猟奇殺人」「川奈産業の御曹司、兇漢の毒牙に果てる」「無残にしておぞましきその手口。犠牲者は一人ならず」との見出しの下に、こう書かれていた。

「S市で有数の財閥である川奈昭一郎氏の子息である川奈昭三氏（二四）が、昨日未明、H市内の排水溝で死体となって発見された。死体には、これといった外傷もなく、ただ、精巣が二つとも破裂せしめられ、おびただしい出血があった。おそらく川奈氏は、何者かに襲われ、鞆丸を圧迫され、非常なる苦しみの果てに悶死したものと思われる」

「発見現場近くの住人によると、鞆丸を破裂せしめられるという無残な手口で殺された者は川奈氏一人ではないという。すでに、六人もの男性が、だいたいな鞆丸を潰され、絶息したという」

記事を読み終えた津島青年は、「この事件の犯人も捕まっていないのですか？」と問うた。室長は、そういえば捕まったという話も聞きませんなあ、と答えた。

津島青年は記事をノートに書き写しながら、ふと問うた。

「この川奈昭三という被害者ですがね。S市の財閥の御曹司とありますな」

「そうです。この伊集院嬢の許婚者だったはずですよ」

「とんだ偶然ですね。ここにも伊集院嬢が関係しているとは」

考え込む津島青年に、室長はますます張り切った口調で言った。

「明後日くらいに、この青森市にいらっしやるはずですよ」

「ほう、何をしに来られるんですか？」

「なんでも孤児院建設計画を支援されていて、資金集めの慈善講演会を開くのだそうです」
 室長はそう言って、部屋の隅のマガジンラックに挿してある今日付の東奥日報を広げた。下段の広告欄に小さく慈善講演会の記事があった。弁士として、地元県会代議士や旧制高校教授と並んで「安西小百合」の名前があった。

二日後。

鉄筋コンクリート三階建ての青森市公会堂の講堂は懐かしい場所だった。昭和二年五月、改造社の主催で有名作家の講演会が開かれ、憧れていた芥川龍之介も登壇するということで、津島青年は友人とともに聴きにいった。その二カ月後、芥川は服毒自殺を遂げたのだ。

ステージの奥に椅子が並べられ、太った地元県会議員と弘前高校教授、そして講演会のトリをつとめる安西小百合が座っていた。

地味な風采だな……。津島青年は、安西小百合を見やって呟いた。まだ二十歳すぎだろうか、黒っぽい和服を着て、身をすくめるようにして俯いている。隣に座る高校教授が、何かと話しかけ、落ち着かせようとしているようだった。山根という教授の名前を、弘前高校の生徒だった津島は記憶していたが、顔を見るのは初めてだった。

最初に登壇した県会議員の、孤児院についての話は最初だけで後は自らの自慢話に終始する演説が終わった後、弘前高校教授が演壇に立った。世界と日本の孤児院事情を比較し、まだまだ日本ではこうした施設への国の援助が少なく篤志家の個人支援に頼っている状況を嘆き、つづいて、背後に座る安西小百合を指さして言った。

……あれにいらっしやる安西小百合さんは、上海事変で夫君を亡くした後、孤児院建設を思い立たれ、理想の孤児院のあり方を勉強するために、現在、聴講生としてわたくしの授業に出席し、勉強に励まれておられる。なにとぞ、その言葉に耳を傾けられ、尊い篤志をお願いするしだいでもあります。

教授の演説を終わり、安西小百合が立ち上がり、不安げに目を泳がせながら演壇に立った。

「あの……」

第一声は小さすぎて聞き取れず、司会者に注意された小百合は顔を真っ赤にして俯いた。がんばれ。客席で誰かが励ますように叫び、聴衆は改めて拍手を送った。小百合は気を取り直して顔をあげ、マイクに向かって語り始めた。

夫の死後に身を寄せた弘前で、ひとりの孤児の少女と知り合ったこと。家出したその少女を探して東京に行き、都会では不幸な環境に育った者の多くが与太者や酌婦になっているのを知ったこと。少女は無事見つけることができ、今はこの弘前で暮らしているが、いまだに悪夢に苛まれる夜があること等を、ぼつりぼつりと、しかし、しっかりとした声音で語った。

代議士や教授の講演を、斜に構えてだらしない姿勢で聴いていた津島青年も、いつしか身を乗り出し、背筋を伸ばしていた。

ふと、空いていた右隣の席に、遅れてきた華やかな和服姿の若い女性が座った。小百合が演説を終えて、ぺこりと頭を下げると、その女性は立ち上がりブラボーと叫んで手を叩いた。つられて聴衆もいっせいに割れんばかりの拍手を送った。どこかで見た顔だな……。その顔が、新聞で見た伊集院満枝だと気づいたときには、彼女はすでに会場を去っていた。

講演会が終わった後は、立食形式の晩餐会だった。津島青年は、『サンデー東奥』記者の肩書きで出席を許されていた。安西小百合と並んで部屋の真ん中に立つ伊集院満枝の周囲には分厚い人だかりができて、図々しいが根は気弱な津島青年は近づくのを躊躇した。

ふと、さきほど講演していた山根教授の姿が目に入った。津島青年は山根教授に近づき、ご無沙汰しております弘前高校で先生の薫陶に接した津島です、と頭を下げた。ああそうですかとおざなりな返事を寄越す山根教授に、津島青年は、高校にいたころから先生の孤児院研究の水準の高さに感銘を受けておりました、ぜひ『サンデー東奥』で大々的に紹介したい、ついでにはあの方にゆっくりとお話を伺いたいのですが、と食い下がった。

では来たまえ。そう言って山根教授は、失敬失敬と人垣をかきわけ、伊集院満枝に近寄った。この記者さんが、じっくりお話を伺いたいそうです。そう紹介する山根教授の背後で、卑屈な笑顔で頭をさげる津島青年を見やって伊集院満枝は、「どうします？」と隣の安西小百合に問うた。小百合が途方にくれていると、津島青年は、「いえ、安西さんのお話は今日うかがいました。安西さんを応援なさってる伊集院さんのお話を聴きたいのです」と言った。

しばらく津島青年を見つめて黙っていた伊集院満枝は、やがて華やかな笑みを浮かべ、ここではゆっくり話もできませんわね、と言い、「明日の午後、宿までいらっしゃってください」と旅館の名前を告げた。津島青年は、ありがとうございます、と頭を下げた。

その前夜、津島青年は宿から『モダン日本』編集長の馬海松に電話を掛け、東奥日報社で調べたことを報告し、ついでに「単なる偶然ですが」と伊集院満枝の件を喋った。伊集院満枝……。馬海松はそう呟いてしばらく黙っていたが、君、その女性を取材してみてください、と言った。「彼

女は婚約者を、睾丸を潰されるといふ無惨な殺され方でなくしている。どんな思いをしたかを聞きなさい」と命じ、美しい令嬢が絡んでいるだけで記事が華やかになるから、と付け加えた。

取材の約束が取れた。馬編集長も満足してくれるに違いない。そうほくそ笑んで退席しながら、ふと背後を振り向くと、さきほど演説していた県会議員が、伊集院満枝の手を握って離さず、しきりと話しかけていた。満枝はにこやかに応対していたが、議員が眼をそらした一瞬、面差しに嫌悪感が浮かんだ。

田舎代議士が……。貴族院議員を兄にもつ津島青年は、同じ嫌悪感を共有できたように思った。

その夜更け。

「すばらしい講演だったわね」

青森市内の老舗旅館の広い和室、縁側に置かれた籐椅子に腰をおろし、葡萄酒を注いだグラスを傾けつつ窓の外の月夜を眺めながら、浴衣姿の伊集院満枝は言った。

「ずいぶん寄付も集まりそうだわ。皆さん、あなたの講演に感動なさったって、おっしゃっていただけだよ」

グラスに口をつけ、ちらりと畳の間を見やると、布団をふたつ並べて敷いた畳の奥に寄せられた食卓に肘をついた安西小百合は、身を固くして座って俯いていた。

慈善講演会の開催を発案し、取り仕切ったのは満枝だった。青森市内外から多くの有力者が集まったのも、満枝のおかげであった。満枝の資産と人脈を、孤児院建設の夢を実現するため遠慮なく利用させてもらおうと心に決めた小百合だったが、講演会当日の夜、満枝と二人、同じ部屋

に泊まると知って顔色を変えた。

伊集院満枝と二人、同じ屋根の下で一夜を過ごすのは、四年ぶりだった。昭和五年の正月、H市の図書館で出会った満枝から、小百合は「湖南省農民運動の報告」なる小冊子を渡された。支那の革命家が指導し、地主階級に乱暴を働いた農民暴動についての危険な報告書だった。文書を返しに来た小百合を、満枝は晩餐でもてなし同じ寝室で一夜を過ごしたのだった。怯える小百合に満枝は言った。「あなたには、指一本、触れる気はないわ。佐和子さんと違って」……。

「ありがとうございます……」

満枝から目をそらしたまま、小百合は小さく言って頭を下げた。満枝は、やっと口をきいてくれたわね、と寂しげに俯いた。その寂しげな横顔に、ふと、小百合の胸の奥で、不快な、あえて名づければ怒りに似た感情がこみあげてきた。

「満枝さん」

小百合は居住まいをただし、満枝に顔を向けた。そのきっぱりした声に驚いたように、満枝はグラスを膝に置き、小百合を見やった。

「猪俣佐和子さまは、お元気でいらっしゃいますか？」

そう問うて、小百合はそう問うた自分に戸惑った。なぜ、そんなことを聞くのだろうか？

「え……」

小百合以上に、満枝は狼狽うろたえていた。狼狽える満枝に、さらに不快の念をかき立てられた小百合はもはや自分を制御できなかった。彼女の口から、とめどなく言葉が流れ出た。

「あの日、学校の礼拝堂チャペルで、わたくしは、満枝さんと佐和子さんの密談を、盗み聞きました。

そのことは、満枝さんはご存知ですわよね」

「え、ええ……」

「佐和子さんは、満枝さんと一緒に上京したがっていたわ。満枝さんは、川奈さんとの婚約があるから無理だとおっしゃっていた。川奈さんが子供をつくれないう体になれば、話は別だとも」

「……………」

「ご自身のことを、罪深い女だともおっしゃった。その後、川奈さんがどうなったか……」

言いかけて小百合は真っ青になって立ち上がった。後ずさりし、壁に背をつけた。

伊集院満枝は籐椅子から立ち上がり、ゆっくりと小百合に歩み寄っていた。静かに唇を結び、瞬きもせず小百合を見据え、やがて息がかかるまで接近した。

小百合の眼から、涙が溢あふれた。今にも膝がくずれそうだった。殺される……。なぜ自分はあんなことを言ってしまったのか。

満枝の右手が、小百合の顔に向かって差し出された。小百合は眼を瞑こむった。

「それ以上、言ってはだめ」

小百合の頬に、柔らかな満枝の指が触れた。そっと頬をつたう涙を拭ぬい、満枝は静かに続けた。「あなたには汚れてほしくない。そうとも言ったはずよ」

目を閉じたままの小百合の正面から、満枝の気配が消えた。おそるおそる目を開けると、満枝は再び籐椅子に腰をおろし、葡萄酒のグラスに口をつけていた。飲み干してから、しばし黙した後、満枝は口を開いた。

「猪俣佐和子さんは、上京して非合法活動に身を投じたらしいわ。かつてわたくしの家の小作人

だった者が同じ活動に携わっていたから、彼を通じて佐和子さんがどうしてらっしゃるか耳にしていたけれど、三年前、その元小作人が転向してしまつてからは、ほんとうに音信不通なの」
ガラス越しに月を見つめながら、満枝は続けた。

「おそらくあなたは、私が佐和子さんを咬そそのかして恐ろしいことをさせていると、そう思つてらっしゃるのでしょうかね。それは半分は当たつてはいるけれども、半分は違つてはいる」

それから身をよじつて小百合の方に眼を向けた満枝の面差しに、小百合は胸をつかれた。満枝の面差しは、いつになく頼りなげであつた。小百合には初めて見る面差しだつた。

「わたくしと佐和子さんは、同じ種類の人間なの。自分の手で何かを壊さずにはいられない。そんな業ごうに、悪霊あくりょうに取り憑つかれた同類。でも小百合さん、あなたは違う」

満枝は立ち上がった。衣服棚に向かい、扉を開けて自分の洋服を取り出し、着替かえ始めた。紺色のセーラー服にゆつたりしたパンツ、釣鐘つね帽子ぼうし。そのまま出入り口へと向かつた。

ふと足を止めて振り向き、息をつめて見守る小百合に、満枝は言つた。

「わたくしが今から何をしようとしているのか、たぶんご存知よね」

それから、口を大きく横に広げて笑い、静かに問うた。

お止めにならないの？

身動きできぬまま口を閉ざす小百合に、満枝は言葉を重ねた。

「わたくしが世界を壊しつくした後、あなたのような人に建て直してもらいたい、そう思つてい
るのかもしれないわね、わたくしは」

三十分後。

「いやはや、ほんとうに来ていただけるとは……」

青森市内の小ぢんまりとした二階屋の六畳間で伊集院満枝は、講演会で演説していた倉石くらいしという県会議員と向かい合つて座つていた。

「実になりたいことです。ろくなおもてなしもできませんが、ま、どうぞ」

食卓には酒の銚子とつまみが並んでいた。親戚の女性が一人住まいしている家だが、病やまいで実家に帰つていたので、と倉石は説明した。「親戚の女性」が妾めかけであることは容易に想像できた。

「残念ですが、あまり時間がございませんの」

差し出された銚子を手で断つて満枝は立ち上がり、倉石の傍らに座つた。ぴつたりと身を寄せられた倉石は、満面に下卑た笑みを浮かべつつ問うた。

「泊とどまつていかれないのですか？」

「わたくし、今夜は安西さんと同じ部屋に泊とどまつておりますの。だからもう、失礼させていた
かないと、あらぬ疑いを抱かれますわ」

「そんな、まだ何も話しておらんじゃありませんか」

「別にお話することなど、ございませんから」

満枝は、胡座あぐらをかけた倉石の股間に手を伸ばした。目を丸くした倉石に、満枝は笑顔で続けた。
「あなたの睾丸を潰すのに、それほど時間はかかりませんから」

言うなり、陰囊を握り締め、捻ひねりあげた。満枝の掌のなかで睾丸が一つ破裂した。倉石の喉の奥で悲鳴が押し潰され、小さく甲高い呻うめきとなつて漏れた。そのままどさりと後ろに倒れ、両手

で股間を押さえ、甲高くわめきながら七転八倒した。辜丸を潰した右の掌を、左手ではらい清める仕草をしながら立ち上がった満枝は、まだ意識を保って悶えている倉石を見やって呟いた。

「ひとつ、潰し損ねたわ」

満枝の背後で、襖が開いた。だんな様！家事を任されている老いた下男が、物音に駆け寄ってきたのだ。満枝は振り向くと、下男の肩を両手で押さえ、股間を膝で蹴り上げ、背後に突き飛ばした。仰向けに廊下に倒れた下男の喉笛に踵を踏み下ろした。喉笛を砕かれ下男は絶命した。畳の間では、倉石が悶絶していた。内部で辜丸が裂けたため陰囊が急激に膨張し、陽物の先から血が噴き出しているのだろう。はだけた着流しからのぞく禪が、真つ赤に染まっていた。長くはもたないわね。このまま死ぬまで放っておきましょう。

満枝はそう呟き、一瞬笑みを浮かべて、断末魔の激痛に痙攣する倉石に背を向けた。

三十分後。

旅館に戻った満枝が部屋に入ると、小百合は籐椅子に腰をかけていた。ただいま、そう告げて振り向いた小百合の面立ちを見て、満枝は驚いた。顔が真つ赤で、その手には、葡萄酒がなみなみと注がれたグラスが握られている。

「おかえりなさい」

満枝を見やり、呂律の回らない口調で小百合は頭をさげた。

「また、誰か去勢なさったんでしょ」

凍り付いたように動かない満枝を一瞥し、小百合はさらに葡萄酒を飲み干して、瓶からグラス

に注いだ。

「小百合さん、あなた、お酒なんか……」

そういう満枝に、小百合は怒鳴り返した。

「飲まずにいられますか！」

満枝は息を呑んだ。小百合は人が変わったように、満枝をにらみつけている。今まで見たこともなかった面差しにたじろぐ満枝に、小百合は憎々しげに続けた。

「わたくしは、あなたみたいな人殺しに援助を受けている。あなたが佐和子さんに川奈の坊ちゃんを殺させて手に入れた財産のおかげで、夢がかなえられそう。でも、そのことはいいの……」

小百合は立ち上がり、面差しを強張らせて二の句がつけずにいる満枝の服の胸ぐらを掴んだ。

「冗談じゃないわ。あなたが壊した世界をわたくしに建て直せですって？ あなた、絶対にわたくしを舐めてるわ。ほんとうは、貧乏役人の娘で、あなたみたいな美人じゃなくて、性格もおとなしくて、地味で、あなたと違って何もできない小娘だと思ってるくせに！」

「思っでないわ！」

満枝の眼から涙が溢れていた。

「そんなことおしゃらないで！ わたくしはただ……」

「大金持ちのお嬢さんの、革命ごっこに付き合っって、その後始末なんて、真っ平よ！」

小百合の膝が突き上げられ、満枝の両脚の付け根に打ち込まれた。膝が恥骨を直撃し、満枝はのけぞって呻いた。両手で股間を押さえ、その場にうずくまった。その頬に平手打ちを食わせ、小百合はばたきと布団に倒れた。

冗談じゃないわ……。馬鹿にしないでよ……。
繰り返される眩きは、やがて寢息へと変わった。満枝は、股間を押さえてうずくまったまま、しばらく動けずにいた。肩で息をし涙を流しながら、じっと苦痛に耐えていた。

翌朝。

小百合が眼を覚ましたとき、満枝は物思いに耽る（ふけ）ように籐椅子に座っていた。身を起こそうとして、小百合は両手で頭を抱えた。疼く（いた）ように痛かった。

二日酔いね。気がつくとも満枝が、水の入ったコップを持って、傍らに座っていた。差し出されたコップの水を夢中で飲み干す小百合を見やりながら、満枝は問うた。

「大丈夫？」

ええ……。人心地はついたが、まだ頭のなかぐるぐる回っているようだった。

「わたくしも、まだ少し痛むの」

満枝は立ち上がり、少しびっこをひくようにして籐椅子に戻りながら言った。

「あなたに蹴られたところが」

小百合はコップを取り落とした。昨夜のことを思い出した。誰かを去勢しに満枝が部屋を去った後、小百合は満枝の葡萄酒を次々とあおった。帰ってきた満枝に罵声を浴びせ、彼女の股間を蹴り上げたところまでは記憶にある。なんてことを。小百合の顔が恥ずかしさで赤く火照り（ほて）、つづいて恐怖がこみ上げてきた。

相手は人殺しなのだ……。

「わたくし、もう行きます」

やがて響いてきた静かな声音に、はっとして見上げると、籐椅子から立ち上がった満枝は、すでに外出用の洋装に着替え、荷物を旅行鞆に詰め終えていた。

支払いはわたくしが済ませました。お昼まではここで休んでらしても結構よ。午後から記者が来ますけれど、小百合さん、一人で応対なさって。

「もう、これ以上、わたくしが手助けしないほうが、きつとうまくいくわ」

そう言って微笑む満枝の頬に、昨夜の頼りなげな色が浮かんでいた。小百合は立ち上がろうとして吐き気がこみあげ、また座り込んだ。無理はなさらないで。満枝はそう言い残して去った。

その日の昼。

指定された旅館の玄関前の通りを、津島青年は行ったり来たりしていた。その日の朝、東奥日報社に顔を出した彼は、昨晚の講演に登壇していた県会議員の倉石が、妾宅で殺害されたことを知った。しかも、鞆丸を潰され、内出血で陰囊が破裂し出血多量で死んだと、くだんの資料室長に耳打ちされた。

伊集院満枝が行くところ、男は鞆丸を潰されて死ぬ……。

偶然と言い切れるか？

そして自分が、華族子弟が去勢されて殺された事件を取材していると知られたら、どうなるのだろうか……？

しばし立ち止まって考え込み、津島青年は旅館に背を向けて歩き出した。満枝嬢の談話は、適

当にでつちあげよう。

二日後の早朝。

北海道日市の伊集院家の洋館の居間で、かつては伊集院家の使用人であり、今は満枝が受け継いだ農地一切を管理している篠原ヨシが、テーブルにティーセットと焼いたトーストを並べていた。

お嬢様のために、こうして朝のご用意をするのも久しぶり……。楽しみに体を動かすヨシの背後から、おはよう、と寝間着姿のまま、寝乱れた髪を手で整えながら、伊集院満枝が入ってきた。「よくお休みになれましたか？」

そう問うヨシに、満枝は恥ずかしげに肩をすくめた。昨日の夕刻、青函連絡船で青森から日市に入り、久しぶりの実家に寄った満枝は、ヨシの顔を見るなり抱きついて号泣し、子供のよう泣きじゃくりながら床に入った。小百合さんが……。小百合さんが……。幾度も眩きながら、ヨシに抱かれて寝入ったのであった。

一夜ぐっすり休んで快活さを取り戻した満枝は、食卓につくと紅茶のカップを持ち上げ、口元に運んだ。その前に、ヨシが分厚い茶封筒を置いた。開けると、東奥日報、青森日報、東北タイムスといった新聞紙の束が入っている。

「ヨシ、見て見て」

満枝は弾んだ声で、食卓に広げた紙面を示した。いずれも、安西小百合の講演会の記事だった。写真入りで伝えているものもあった。小百合の「談話」を長く紹介している紙面もあった。

……わたくしの志す理想の孤児院とは、ただ、孤児たちを引き取って育てるだけでなく、立派な国民として教育する設備です。もちろん資金を援助していただくのはありますが、不幸な環境に心を蝕まれた子供たちを教え導いていただける方々にも、お助けを請いたいのです。「ねえ、小百合さん、こんなご立派なことをおっしゃってるわ」「そうですわね」

ヨシは、小百合を二度見たことがある。一度目は、満枝に文書を返しに訪れた時。二度目は、上海で夫を亡くした小百合に、満枝の小切手を渡した時。地味な面立ちで儂げな雰囲気ながら、どこかしんの強そうな娘だった。

「ヨシ」

満枝は言った。あと二十万円、小百合さんに寄付して差し上げて。それから、資金運用に長けた信用できる人を紹介してあげなさい。

「それで、わたくしは小百合さんとは御縁を切るわ」

訝しげな面差しのヨシに、満枝は寂しく微笑んで呟いた。もう、あの方は大丈夫よ……。電話が鳴った。ヨシが受話器を取り上げ、それから満枝に「馬という方からです」と告げた。受話器を受け取った満枝は幾度か頷いた。大丈夫です、あの男はうちの社では絶対に使いませんと相手の声が流れてきた。ご苦労様です。そう言って電話を切った満枝の頬には、さきほどとは打って変わった冷酷な色が浮かんでいた。

そういえば……。満枝はかすかに笑った。ほんとうはあの男の睾丸も潰すはずだったのよね。

その三十分ほど前。

文藝春秋社の玄関を、肩を落として出てくる津島青年の姿があった。その直前彼は、『モダン日本』の馬編集長から、原稿がボツになったことを聞かされた。理由を訊ねても答えてくれない。原稿料は払うから、と渡された紙幣入りの茶封筒を懐に、すこすこ引き下がるしかなかった。

「さてと……」

津島青年は寒空を見上げて呟いた。

「また、別の社に売り込まなきゃ」